

■特集■ぜひ読みたい短歌の本

小高賢の三冊のアンソロジー

加古陽

意外に思うかもしれないが、新聞社の文化部や出版社の界隈では、歌人小高賢を知らなくても編集者鷺尾賢也を知る人が少なくない。講談社の人文書を長くリードし、「選書メチエ」や「健康ライブラリー」「現代思想の冒険者たち」「日本の歴史」などのシリーズを続々と立ちあげた名編集者であるだけでなく、業界横断的に編集者、文芸記者が集まる「ムダの会」の主宰者でもあり、ちよっとした有名人だった。

私自身、鷺尾（小高）と直接の面識はないが、東京新聞原発取材班の総括デスクだった当時、幻冬舎から出した『レベル7』というノンフィクションをめぐる、間接的な縁があった。この本が出たのは、東京新聞の原発報道を高く評価した鷺尾が「ムダの会」主要メンバーの女性編集者にけしかけたことがきっかけだったからだ。

その鷺尾が歌人小高賢の名で編集し、著したのが、いずれも新書館から発行された

『現代短歌の鑑賞101』（一九九九年）、『現代短歌の鑑賞77』（二〇〇二年）、『現代の歌人140』（二〇〇九年）の三冊のアンソロジーだ。『現代短歌』は明治三十六（一九〇三）年生まれの前川佐美雄から昭和四十五（一九七〇）年生まれの梅内美華子まで百一人の歌人の代表歌を三十首ずつ紹介し、小高が解説を付している。『現代の歌人』も同じ構成で、明治四十一（一九〇八）年生まれの小暮政次から昭和五十（一九七五）年生まれの永田紅までが登場。現役の歌人の多くは自選、故人は小高か関係者が選歌した。こうして二ページに一人ずつ紹介し、読み終えた時には現代短歌の主だった作者と歌を概観できるというわけだ。

解説には歌人十編集者の小高ならではの、鋭い眼と文章の魅力がある。たとえば、『現代短歌』の穂村弘の項の書き出しはこうだ。〈依万智よりも、加藤治郎よりも、穂村弘の出現は現代短歌に大きなショックを与え

たのではなかっただろうか〉。このあと何を語るのだろうか。この書き出しを読んだら、誰だって続きを読みたくなる。

佐佐木幸綱の項は、〈佐佐木幸綱以前・以後ということばがある。現代短歌を歌人によって時代的に考えるときに使う。幸綱は上の世代にも属するし、下の世代の長兄でもある〉。やはり、その先を読みたい。

意表を突く歌人もいる。『現代の歌人』の浜田蝶二郎もその一人。〈かうするつもりだったが結局かうなつた 長き一生を要約すれば〉〈わたし死んでゐなくなつたと感じたらそれはわたしがまだゐることだ〉といった、どこか哲学的な歌が並ぶ。不勉強な私としては、ちよっとした発見だった。

『現代の歌人』は『現代短歌』の百一人のうち約八十人の歌人を重ねて取り上げ、新たに約六十人を入れた。両方で取り上げた歌人の歌は、『現代短歌』とダブらないように、新しい歌集から選んでいる。このあ